

呉汝綸日本教育視察の筆談記録 (訳注)

呂 順 長

明治前期の日中知識人による筆談の記録は多く残されているが、明治後期になると、両国間の人的交流がいつそう広がったにもかかわらず同時期の筆談記録はかえって多くは見つかっていない。本稿では、まず明治後期に日本を訪れていた中国人視察旅行者による視察旅行記に含まれる筆談記録に対する調査の結果に触れ、それから1902年に教育視察のために来日した呉汝綸の来日経緯を紹介し、最後に主な内容として呉汝綸と井上哲次郎・林正躬・長尾楨太郎・研経会・望月興三郎らとの筆談資料を原文と訳注の形で紹介する。なお同筆談資料の内容に対する分析などは近く執筆する中国語論文で行う予定である。

キーワード：呉汝綸、筆談、井上哲次郎、林正躬、長尾楨太郎、研経会

はじめに

漢文による筆談は漢字文化圏の別言語使用者同士の意思疎通の手段として古くから行われてきた。近世までの筆談資料としては、例えば入唐求法僧円仁の『入唐求法巡礼行記』に残された記録、江戸時代に日本・中国・琉球国・朝鮮国・安南国などに漂着したいわゆる漂流民の筆談記録、朝鮮通信使の筆談記録、朝鮮燕行使が見聞した記録『燕行録』に残されている筆談記録などがよく知られている。

明治期に入ると、日清修好条規の締結により日清両国間の人的往来が増えたが、明治初期においては、お互いに相手国の言葉が話せる人はまだ少なく、両国人同士の口語による交流は困難を伴っていた。幸い日本では江戸時代の名残の濃厚な環境の中にあって日本人の漢文の素養が非常に高かったので、日中知識人の筆談による交流がよく行なわれ、それによって多くの筆談記録が生み出された。例えば、元高崎藩主大河内輝声と清国駐日公使館員の筆談記録『大河内文書』、漢学者石川鴻斎と駐日公使館員の筆談記録『芝山一笑』、来日中国人文人書家王治本の金沢での筆談記録など、いずれも広く知られている。

明治後期になると、中国人日本留学生・中国人日本視察者・中国人日本亡命者・中国に招かれた日本人教習なども加わり、両国間の人的交流がいつそう広がった。しかし、このように交流の規模が大幅に拡大したにもかかわらず、同時期の筆談記録がそれほど多くは見つかっていない。その理由として、相手国の言語を身につけた人が大幅に増えたこと、大抵の相手国訪問者に通訳が付き添っていたこと、日本人の中国または中国人文人への憧れが減退していたこと、筆談があったとしても断片的なものが多くその記録はよく保存されていなかったこと、などが考えられよう。

明治後期に日本を訪れていた中国人視察旅行者による視察旅行記が数多く残されているのは周知のとおりである。今回、拙編『晚清中国人日本考察記集成・教育考察記』（杭州大学出版社、1999年）、劉雨珍・孫雪梅編『晚清東遊日記彙編・日本政法考察記』（上海古籍出版社、2002年）所収のものを中心に、明治後期の30数冊の中国人日本視察旅行記に対して、そのなかに筆談記録がどれだけあるか調査を行なった。その結果、筆談の詳細な記録が見付かったのは呉汝綸の『東遊叢録』（1902）と舒鴻儀の『東瀛警察筆記』（1906）の二冊に止まり、そのほか段獻増の『三島雪鴻』（1905）、胡景桂の『東瀛紀行』（1903）、嚴修の『東遊日記』（1902、1904）の三冊には、筆談が行なわれたという記載はあったものの、問答式の詳細な記録は見つからなかった。

上記の舒鴻儀・段獻増・胡景桂・嚴修ら四人の筆談に関する記載については稿を改めて詳しく紹介する予定であるが、彼らの筆談の際の状況を簡単にまとめると、次の三つのパターンとなる。一は、通訳が付き添っていながら、当事者はそれをよそに筆談を行ったもの。これはまさに黃遵憲が宮島誠一郎と筆談する際に述べた「舌難伝語筆能通、筆舌瀾翻意未窮」（舌は語を伝え難く筆は能く通じ、筆舌瀾翻して意未だ窮せず）¹⁾ というような佳境を求めるためであったろう。二は、通訳が不在なのでやむを得ず筆談を行ったもの。三は、時には通訳を通じ、時には筆談を行うという両者を交えて交流を行ったもの。またほかに視察者側が筆談を求めたが、出来ないというのを理由に断られる場面もあった。

呉汝綸『東遊叢録・函札筆談』には、日本人からの書簡、一部の新聞記事の訳文、日本人関係者の談話記録のほかに、井上哲次郎・林正躬・長尾楨太郎・研経会・高木政勝・早川新次・失名氏・望月興三郎・田中不二麿との9回の筆談記録が収録されている。

本稿では、呉汝綸日本視察の背景を紹介したうえ、紙幅の都合もあり主に呉汝綸と井上哲次郎・林正躬・長尾楨太郎・研経会・望月興三郎らとの筆談資料を原文と訳注の形で紹介する。資料の内容に対する分析などは近く執筆する中国語論文で行う予定である²⁾。

一、呉汝綸日本視察の背景

日清戦争での敗戦は、中国人とりわけ中国知識人を震撼させるものとなった。「日本小国耳、何興之暴也」（日本は小国のみ、何ぞ興^{にわ}るの暴かなるや）（張之洞『勸学篇』）、これは中国の運命に関心を持つ人たちの共通の疑問であった。しかし、その答えを得るのはそれほど難しくなかった。富国強兵というスローガンのもとで、近代教育の普及に余力を遣さずに取り組んでいたことが日本の急速な発展をもたらした主な原因ではないかと多くの中国人は思った。このような背景のもとに、日清戦争後、古くから日本に多大な文化的影響を与えた中国が高いプライドを捨て日本を師として学ぶようになった。これは近代日中交流のもっとも大きな特徴といえ

1) 劉雨珍編校『清代首届駐日公使館員筆談資料彙編』下冊、453頁、天津人民出版社、2010年12月。

2) 早稲田大学古典籍研究所と浙江工商大学東亜文化研究院の共同主催で2013年9月13-16日に中国杭州市で行われた国際学術シンポジウム「東アジアにおける筆談の研究」で「呉汝綸日本視学筆談記録」というテーマで発表した。中国語論文は2014年中に刊行予定の同シンポジウムの論文集に収録される予定である。

よう。明治後期に大量の中国人留学生が来日し、また多くの日本書が翻訳によって中国に紹介され、数多くのいわゆる日本人教習が中国に招聘された。さらに多くの官僚や士紳なども日本を訪れ、日本の学校や工場などを視察した。このような日中交流の緊密ぶりから、まさに日中の蜜月時代だったとも言えようが、その裏に実はそれぞれの利益の打算もあり、その意味では同床異夢のような関係でもあった。蜜月時代であろうが、同床異夢であろうが、日中双方にとって大きな利益があったからこそ、近代における日中の教育文化交流が成り立ったのである。

数多くの中国人官紳による日本視察活動のなかで、1902年に京師大学堂総教習の身分で来日した呉汝綸³⁾一行の日本視察はもっとも注目されたものと言えよう。それは京師大学堂（北京大学の前身）の再開にも絡む活動であったので、まずここで学堂の創設と再開の歴史を簡単に振り返りたい。

日清戦争敗戦後の翌年、刑部左侍郎李端芬は『時事多艱需材孔亟請推广学校以励人材而資御侮恭折』（普通略して『請推广学校折』と称す）を上奏し、はじめて「京師大学」の設立を提案した。しかし、それから大学堂が設立されるまでさらに二年の時間を要した。1898年6月11日、維新変法の動きが高まるなか、光緒帝が『明定国是詔』で正式に変法を宣言し、京師大学堂の設立を直接命じた。7月3日、梁啓超によって起草された『奏擬京師大学堂章程』が批准され、中国近代史上初めての国立総合大学京師大学堂が誕生した。その後戊戌政変により、ほとんどの維新改革の措置が否定されたが、京師大学堂は戊戌変法の成果として存続した。その後、1900年に義和団事件が起こり、同年8月3日を以て京師大学堂が閉鎖された。その翌年、かつて戊戌維新の新政を自ら否定した慈禧太后は光緒帝の名義で変法上諭を發布して新政を開始し、さらに同年9月14日に興学詔書を發布し、京師大学堂の再開を決定した。19世紀末から20世紀のはじめにかけて、中国は日清戦争・戊戌政変・義和団事件など一連の戦争と事件を経験したが、京師大学堂はまさにその激動の時代に誕生し、苦難の幼少年期を過ごし、後に「反骨の北京大学」といわれるほど幼少年から屈強な性格が養われたと言えよう。

大学堂の再開が決まった後、1902年1月に工部尚書の張百熙が兼任として京師大学堂の管学大臣に任命された。管学大臣とは京師大学堂の総長に相当するものであるが、全国の教育行政の最高機関としての学部がまだ存在しない時代なので、学部の大臣の役割も兼ねていたポストである。では、大学堂の学長に相当する総教習というポストに誰が就くか、張百熙はその人選を再三考慮したうえ、国学の造詣が深く、さらに西学にも深い理解がある呉汝綸を推薦した。呉は最初固辞したが、張の熱意に心を打たれ、総教習への就任に先立ちまず日本への教育視察を行うという条件をつけて総教習への就任を承諾した。

張百熙と約束したとおり、1902年6月9日、62歳の高齢となった呉汝綸は同大学堂提調の紹

3) 呉汝綸：1840－1903、清末の文学者・教育者。字は摯甫、安徽桐城の出身。1865に進士になり、内閣中書となった。1868年に直隸総督曾国藩の幕府に入り、後に李鴻章の幕府に入り、深州・冀州の知州、天津知府、冀州知府を歴任。1889年に保定の蓮池書院の主講（山長）となり、在任中には欧米の学問を積極的に取り入れた。1902年、京師大学堂の総教習に任命され、教育制度の視察に来日。日本から帰国して数ヵ月後の1903年2月に病気のため故郷の桐城で亡くなった。

英・栄勲、随行員の杜之堂・李光炯、通訳の中島裁之⁴⁾を率いて唐沽から出発して日本へ向かった。長崎・神戸・大阪・京都を経由して東京に到着したのは6月28日である。経由地でも学校などの視察活動が行われたが、10月15日に東京を離れるまで呉の視察活動は主に東京で行われていた。

呉汝綸の日本教育視察に関しては、これまでにその視察の経過や成果などについて幅広く研究され多くの研究成果⁵⁾があがっているのですが、ここでは触れないことにする。本稿では主に呉の日本教育視察期間中の筆談を取り上げるが、それについて、呉汝綸の長男で当時留学生として来日し、呉の視察活動にも同行していた呉闔生は、「(父は)東京に在りて日夕客に応ずること百十を以て数え、皆一一親みづから興ともに筆談し、日に数百紙を尽くし、教育の事に及ばざる者は一語も無し。接する所も亦た多くは教育の名家なり。」⁶⁾という記録を残しており、呉汝綸が数多くの日本の知識人と筆談を行ったことが分かる。しかし、前にも触れたように、呉汝綸『東遊叢録・函札筆談』には9回の筆談記録しか残されておらず、少なからずの筆談記録が失われたことが推測できよう。

以下、主に従来あまり注目されなかった呉汝綸と井上哲次郎・林正躬・長尾楨太郎・研経会・望月興三郎らとの筆談資料を原文と訳注で紹介する。

二、井上哲次郎⁷⁾との筆談記録⁸⁾

原文：

問 久欲來親大教，今日幸獲所願，至為榮寵。

4) 中島裁之：1869-1939、熊本県出身。1897年に中国に渡り、中国各地を回った。1897年に呉汝綸の主宰する蓮池書院に呉の門下生として入り、呉について学ぶかたわら他の生徒に日本語などを教えたりした。1901年に呉汝綸などの助力を受け北京に東文学社を開き、一時多くの受講生を集めた。

5) 呉汝綸の日本視察については主に以下の先行研究がある。応夷「呉汝綸と『東遊叢録』—ある「洋務派」の教育改革案—」(平野健一郎編『近代日本とアジア：文化の交流と摩擦』、東京大学出版社、1984)、汪婉「京師大学堂総教習呉汝綸の日本視察」(『中国研究月報』第47巻3号、1993年3月)、趙建民「呉汝綸赴日考察與中国学制近代化」(『档案與史学』1999年第5期、1999年10月)、王鳴「呉汝綸の日本教育視察」(『河北師範大学学报』第2巻第2期、2000年4月)、許海華「1902年の呉汝綸日本考察について」(『千里山文学論集』82号、2009年9月)、鈴木正弘「清末における日本の歴史教育に対する関心の高まり—呉汝綸の日本訪問による成果—」(『アジア教育史研究』第20号、2011年3月)、董秋艷「日清戦争後中国における日本の女子教育情報：呉汝綸による日本視察(1902)を通して」(『教育史学会紀要』第55号、2012年10月)、程大立「呉汝綸対日本図書館の考察と認識」(『淮北師範大学学报』2013年第1期、2013年2月)。また鈴木正弘上記論文では呉汝綸日本訪問の成果として筆談の内容についても一部紹介されている。

6) 施培毅・徐寿凱点校『呉汝綸全集』第4冊、1155頁、黄山書社、2002年。

7) 井上哲次郎：1856-1944、哲学者。筆談当時の身分は東京帝国大文科大学学長である。

8) 筆談は9月9日に行われた。井上哲次郎の『巽軒日記』(東京大学史料室、2012年)に「九月九日、呉汝綸、小村俊三郎、新保徳寿、古川義夫来訪す」とある。小村俊三郎は外務省の通訳官で呉汝綸の視察活動によく同行していた人物。また呉汝綸の『東遊叢録・摘抄日記』(拙編『晚清中国人日本考察記集成・教育考察記』(杭州大学出版社、1999年)所収)に、「八月八日(9月9日)、下午與小村同訪井上哲次郎。

- 答 不敢當，不敢當！貴國今日之急務，以教育為第一。教育者，不應時勢，則無其效。孔子之教大好，然今日則見其未備。先生以為何如？
- 問 來此為欲瞻仰貴國教育，所見皆是外著⁹⁾之制度，已足敬佩。尚欲得公等誨示，一問貴國教育之精神。
- 答 敝邦教育，以融合調和東西洋之思想為目的。自然科學，莫如西洋。然唯取自然科學，而無精神以率之，則將不堪其弊。故以我精神運用之，此我教育所由而立也。貴國亦要先講西洋自然科學，然無所謂哲學者，則教育之精神難立也。教育精神，畢竟在倫理。今日之倫理，非打東西之粹而為一治¹⁰⁾不可。我邦學者所努力在此。
- 問 久聞執事精研哲學倫理學，願聞要領。
- 答 哲學倫理學之事，最要絮說，不能簡短述之也。然貴國古來之倫理雖大好，而在今日則有可補之者，是弟等所欲言也。
- 問 請言今日當補之事。
- 答 試舉其二三。曰崇人格之觀念，曰重個人之權利，曰自由平等之精神，曰知實現理想之要。其他不遑屈指。今如理想，殊重要者也。
- 問 願聞理想之重要。
- 答 理想一也，而有個人之理想，有國家之理想。個人之理想，則倫理之本源也。國家之理想，則國家隆盛之原因也。理想者，非取模範於過去，而期將來者也，欲駕過去一切文明而上之者也。非尚古之意也，逐新而進之意也。
- 問 逐新仍兼尚古乎？抑去古就新乎？
- 答 去古就新之意也。然非慢古，又非棄古。駕古而上，故不畏古也。如印度專尚古，欲一倣古，故遂不能如古。古今時勢已異，以今作古，是所不可能也。印度文明，進寸退尺，良有以也。
- 問 君視敝國古時文明，與印度何若？今時尚有當用者乎？或不可復用乎？
- 答 貴國古代文明，與印度同不可棄，是所以要研究也。弟亦欲研究之也。然使今日之國家及文物如古代，則斷所不敢取也。理想者，所描出於腦中之念也，優於現在之情勢者也。吾人人類，皆不完全者也，故欲進修以近於完全之域，是則理想也。國家亦非完全者，故欲今之國家之完全，是則理想也。理想不過腦中之念，而有動人之勢力者也。多知古今之人物，而有拔其粹，打為一治，以為己之模範，欲使變而為己，是則理想之謂。多知東西諸國之國家，而有拔其粹以大成之，是國家之理想也。故實現理想，則必有進步，又有活氣。古代文明故不足畏也。
- 問 腦中之念，若何能動人？多知易，拔粹難。實現理想似亦尚易，有進步有活氣難。如何而可？
- 答 吾人人類要實現理想，以就進步之塗者也。進修而達向上之域，則有所滿足也，是應理性之要求故也。物質無精神，如死然。唯理想者，驅人而赴向上之域，是故有活氣也。若人之生

其言教育精神、在知實現理想之重要。理想在腦、能驅人使赴向上之域、有活發之氣。若自國家言之、宜取東西文明之粹、打為一塊、以立理想。」とあり、教育の精神の一つとして生徒に理想を持たせることが大切であり、また国家の理想を立てるには東西の文明を融合させることが重要であると井上が筆談で強調し、それが呉にとって非常に印象的だったことが分かる。

9) 外著：表層、外から見える部分。

10) 一治：別々のものが融合して一つとなったもの。

命，而無理想，則如水之滯而腐敗，無活氣也。若有理想，則人生有目的，有當行之道，於是乎不能無活氣也。譬猶水自岩石之間迸出，流而清冽也。理想者，人之至善者也，國家之至善者也。今使人至善，使國家至善，安可以無活氣乎？理想優於過去者此也。

問 理想似知上事，赴向上之域，則是行上事。今敝國欲赴向上之域當奈何？

答 國家離人則無有，人人相集成國家。故國家進步之本在人，即在使各自實現理想，是實教育精神所存也。若自國家而言之，打破從來尚古之風，而取東西文明之粹，打為一冶，以立理想，則國家經營之方針，始可成耳。理想必動人者也，不動人不足以為理想也。理想者，向上之域也。招人使來，人不應，則廢然而返，是失理想故也。已有理想，則感激奮起，不能已者也。然描出理想，必要學問經驗也。

問 學問經驗當奈何？

答 謂精神上之學問及教育也。如哲學倫理學心理學等，亦應大攻究也。

問 使國人各自實現理想，此是教育已成之效驗。應如何下手，乃能成此教育？亦應有方法。

答 自小學至大學，設倫理修身之科，改造將來之國民，則數十年其效必大顯。

問 敬聞命矣。

答 敝邦之學問，以醫學兵學為起點。然及精神上之學問大起，社會之情態，俄然變動，至成一瀉千里之勢。

問 精神上學問大起，當在何時？

答 明治十五六年之頃，進化論始入我邦，而精神上之學問始起。同時基督教傳來，博愛平等之說亦行，因講究哲學。雖此後尚有世運之變，本於精神上之議論者為多。

問 大教多有深趣，獲益匪淺。談紙欲盡携去。

訳文：

問 久しく來りて大教に親しまんと欲し、今日幸いにして願う所を獲、至って榮寵と為す。

答 敢えて當らず、敢えて當らず。貴國の今日の急務は、教育を以て第一と為さん。教育は時勢に應ぜざれば、則ち其の效無し。孔子の教えは大いに好きも、然れども今日は則ち其の未だ備わらざるを見^{あらわ}す。先生は以為らく何如と。

問 此に來たるは貴國の教育を瞻^{せんぎょう}仰^{かう}せんと欲するが為なれば、見る所皆是れ外著の制度、已に敬佩するに足る。尚お公等^{こうら}の誨示^{かいし}を得んと欲し、一たび貴國の教育の精神を問う。

答 敝邦の教育は、東西洋の思想を融合・調和するを以て目的と為す。自然科學は西洋に如くは莫し。然れども唯だ自然科學をのみ取りて、而して精神の以て之を率いること無くんば、則ち將に其の弊に堪えざらんとす。故に我が精神を以て之を運用するは、此れ我が教育の由りて立つ所なり。貴國も亦た先ず西洋の自然科學を講ずるを要するも、然れども所謂哲學なる者無くんば、則ち教育の精神立ち難きなり。教育の精神は畢竟倫理に在り。今日の倫理は、東西の粹を打ちて一冶^{いちや}と為すに非ざれば可ならず。我が邦の學者の努力する所は此に在り。

問 久しく執事の哲學・倫理學を精研せるを聞けば、願わくは要領を聞かん。

答 哲學・倫理學の事は最も絮說^{じよせつ}を要し、簡短に之を述ぶること能わざるなり。然れども貴國

の古來の倫理は大いに好しと雖も、而も今日に在りては則ち之を補う可き者有り。是れ弟等の言わんと欲する所なり。

問 請うらくは今日の當に補うべき事を言われんことを。

答 試みに其の二三を擧げん。曰く人格の觀念を崇ぶこと、曰く個人の權利を重んずること、曰く自由平等の精神、曰く理想を實現する要を知ること。其の他は屈指するに遑あらず。今理想の如きは殊に重要な者なり。

問 願わくは理想の重要なるを問わん。

答 理想は一つなり、而れども個人の理想有り、國家の理想有り。個人の理想は則ち倫理の本源なり。國家の理想は則ち國家隆盛の原因なり。理想なる者は模範を過去に取るに非ずして、將來に期する者なり、過去の一切の文明を駕^{しの}ぎて之より上^{のぼ}る者なり。古を尚ぶの意に非ざるなり、新しきを逐いて進むの意なり。

問 新しきを逐いて仍お尚古を兼ねるか。抑も古を去りて新しきに就くか。

答 古を去りて新しきに就くの意なり。然れども古を^{あなど}慢るに非ず、又た古を棄つるに非ず。古を駕^{しの}ぎて上り、故に古を畏れざるなり。如^{たと}えば印度は専ら古を尚び、一に古に倣わんと欲し、故に遂に古に如くこと能わず。古今は時勢已に異なり、今を以て古と作すは、是れ能う可からざる所なり。印度の文明の寸を進むに尺を退くは、^{まこと}良^{ゆえ}に以有るなり。

問 君の敝國の古時の文明を視るに、印度と何若。今時尚お當に用うべき者有るか、或いは復た用う可からざるか。

答 貴國の古代の文明は、印度と同じく棄つ可からず、是れ研究を要する所以なり。弟も亦た之を研究せんと欲するなり。然れども今日の國家及び文物を古代の如^{ごと}くならしむるは、則ち斷じて敢えて取らざる所なり。理想は、腦中に描き出されし念なり、現在の情勢より優る者なり。吾人の人類は、皆完全ならざる者なり。故に進修して以て完全の域に近づかんと欲す、是れ則ち理想なり。國家も亦た完全なる者に非ず、故に今の國家の完全たらんことを欲す、是れ則ち理想なり。理想は腦中の念に過ぎず、而れども人を動かすの勢力有る者なり。多く古今の人物を知り、而して其の粹を抜くこと有り、打ちて一治と為し、以て己の模範と為し、變じて己と為らしめんと欲す、是れ則ち理想の謂いなり。多く東西諸國の國家を知り、而して其の粹を抜くこと有り、以て之を大成せしむ、是れ國家の理想なり。故に理想を實現せば、則ち必ず進歩有り、又活氣有り。古代の文明は故に畏るるに足らざるなり。

問 腦中の念は若何にして能く人を動かすや。多く知るは易く、粹を抜くは難し。理想を實現するも亦た尚お易きに似たり、進歩有り活氣有るは難し。如何にして可なるか。

答 吾人の人類は理想を實現し、以て進歩の塗^{みち}に就かしむるを要する者なり。進修して向上の域に達せば、則ち満足する所有るなり。是れ理性の要求に應ずるが故なり。物質には精神無く、死然の如し。唯だ理想なる者のみ人を驅りて向上の域に赴かしむ、是故に活氣有るなり。若し人の生命にして、理想無くんば、則ち水の滯りて腐敗するが如く、活氣無きなり。若し理想有らば、則ち人生に目的有り、當に行くべき道有り、是に於いてか活氣無き能わざるなり。譬^{たと}えば猶お水の岩石の間より^{ほとばし}迸り出で、流れて清冽たるがごとし。理想

なる者は人の至善なる者なり、國家の至善なる者なり。今人をして至善ならしめ、國家をして至善ならしめば、^{いづく}安んぞ以て活氣無かる可けんや。理想の過去より勝る者は此なり。

問 理想は上事を知るに似たり、向上の域に赴くは、則ち是れ上事を行う。今敝國は向上の域に赴かんと欲せば當に奈何にすべきや。

答 國家は人を離るれば則ち有る無く、人人相集まりて國家と成る。故に國家進歩の本は人に在り、即ち各自をして思想を實現せしむることに在り、是れ實に教育の精神の存する所なり。若し國家よりして之を言え、從來の尚古の風を打破して、東西文明の粹を取り、打ちて一治と爲し、以て理想を立つれば、則ち國家經營の方針始めて成る可きのみ。理想は必ず人を動かす者なり。人を動かさざれば以て理想と爲すに足らざるなり。理想なる者は向上の域なり。人を招きて來たらしめ、人應ぜざれば、則ち廢然として返る、是れ理想を失うが故なり。已に理想有らば、則ち感激奮起して、已むこと能わざる者なり。然るに理想を描き出すには、必ず學問と經驗とを要するなり。

問 學問と經驗は當に奈何にすべきや。

答 精神上の學問及び教育を謂うなり。哲學・倫理學・心理學等の如きも、亦た應に大いに攻究すべきなり。

問 國人各自をして理想を實現せしむるは、此れは是れ教育の已に成りし效驗なり。應に如何に手を下せば、乃ち能く此の教育を成すべき、亦た應に方法有るべし。

答 小學より大學に至り、倫理・修身の科を設けて、將來の國民を改造せば、則ち數十年にして其の效は必ず大いに顯われん。

問 敬みて命を聞かん。

答 敝邦の學問は、醫學・兵學を以て起點と爲す。然れども精神上の學問の大いに起こるに及び、社會の情態は俄然として變動し、一瀉千里の勢と成るに至れり。

問 精神上の學問の大いに起こるは、當に何時に在るべき。

答 明治十五六年の頃、進化論始めて我邦に入りて、精神上の學問始めて起これり。同時に基督教傳來し、博愛平等の説も亦た行われ、因りて哲學を講究す。此の後尚お世運の變有りと雖も、精神上に本づく議論を多きと爲す。

問 大教は多いに深き趣有り、益を獲ること淺きに^{あら}匪ず。談紙は盡く携え去らんと欲す。

三、林正躬¹¹⁾ との筆談記録¹²⁾

原文：

問 教育之事、僕所求者、貴國明治初年開辦之法。我公身親其事、正下走所側席求教者也。何

11) 林正躬：号は南軒、明治時代の漢学者。『清国史略』（明治9年）・『大東烈女伝』（明治17年）・『国会組織法』（明治20年）などの書籍を公刊している。『清国史略』の奥付によれば「名東県下平民 京都府十二等出仕」、住所「上京第廿四区丸太町烏丸西入常真横町百八十七番地ニ寄留」とある。

12) 筆談は8月26日に行われた。吳汝綸『桐城吳先生日記・教育』（宋開玉整理、河北教育出版社、1999年）に、「二十三日辛巳（8月26日）、林正躬、自署「西京儒員近衛公師友」、通書願一見論教育、因與筆談」とある。近衛篤磨が少年時代、林に従って漢学を修めたこともあり、林は自らを「近衛公師友」と称しただろう。

幸枉臨，喜極。

答 幸賜寬假，不勝欣抃！僕於西京一部維新之學政，知其概略，敢吐露其衷情。明治維新之始，以詔敕使府縣設立學校，京都府知事榎村氏，熱心謀之。其方法分市街為六十學區，一區設一小學。其校舍有新築者，亦有假舊廬為之者。儒家塾及村塾之師，以為小學教師。至郡村山邑亦然。故京都府為日本小學之嚆矢。尋立女學校師範校，養成教師，分遣各校。

問 其初辦時，市村六十學區，同時並舉乎？

答 市村胥吏，聞諭有即興辦者，有怠而不即從事者。屢召喚糾問之，其首舉者賞之譽之，他之怠者，亦遂設立。從明治四年著手，至十年，山村海陬畧徧。

問 此似責成市村自立，其經費亦為籌措否？

答 經費市村自辦。市吏課稅於每戶，與正稅營業稅學校稅，并徵收之。

問 貴國民間，亦不甚富，其不能出稅者，奈何？

答 設立之際，需用巨費，故使其學區內豪商富紳，特募寄附金。而徵每戶之法，有大小之別，且有學兒之家特徵之。

問 學兒每名尚出修金否？

答 皆自出修學料，而不過二三十錢。（案十錢當洋銀一角）

問 修學料蓋是筆墨書籍紙石板等。至於教師之俸，學生亦自出否？

答 修學料即教師之俸。至筆墨書冊，則各自買之，貧者學校吏員或給之。

問 教師之俸，每月二三十錢，不太少乎？

答 一校之生徒，多是八九百名，或六七百名，故集成巨額。尚不足，則以校費補之。

問 八九百名六七百名，則學堂建築之功甚費。其學區亦在西京城內，人煙稠密之處，乃有許多學童。若在鄉市野村，則學童至數百名，必招數里數十里之家，乃能集合。此學童皆幼年，豈盡在學堂寄宿乎？

答 市街一學區，大率千戶，皆稠密，甚便。至僻邑山間，則校舍皆狹小。故大村設數校，以便於就學。小學皆無寄宿舍。近日一二校有設寄宿舍，小童有遠隔數十里而來學者。

問 近時學制大備，辦理自易。在明治初年，學童寄宿，或幹事不能經營，或房屋不能適宜，當有種種困難之處，如何營辦？

答 吾邦學生，皆能守教師監督之命。明治初年生徒，轉¹³⁾不似今日之粗暴。

問 明治初年學堂課程如何？恐其時教師知西學者尚少，如何立課？

答 明治初年學課，屢變改不定。然太要讀書算數地理歷史物理倫理之六科。教師知西學者實尠，然以英書和譯為教科書。

問 明治初年西京已立大學堂否？

答 否。立大學在於明治二十年後。

問 中學校何時立？

答 明治九年始立之。

問 今我國無中小學，京師已擬建大學堂，涉於躐等¹⁴⁾。下走擬將敝國學徒，年在二十內外者，

13) 轉：狀況が大きく変わる様。

14) 躐等：順序や等級を飛び越えること、順序を踏まず一足飛びに進もうとすること。

考其漢學粗成者，招令入學西學，如此可否？

答 尊意所在即可也。少年不知本邦之事體者，直從事於西學，往往誤其方向。

問 學徒年在二十內外，漢學粗成，令研西學，其課程似宜以中學校為主。而初辦欲求簡易，如何定法？

答 中學課程，先以讀本（稱西洋讀本者有數種），擇其善良者授之。如物理化學，則以譯書授之。如方言¹⁵⁾，則聘西人為師。

問 聘西師是一定辦法。敝國外省立學，則尚不能盡用西人。貴國所稱西洋讀本，其書幾種？請開示。

答 明治初年，多用巴禮¹⁶⁾氏讀本。近時用那志與那¹⁷⁾氏讀本，及斯邊左¹⁸⁾氏（案即斯賓塞）讀本等。僕未詳西學，故忘其名。

問 貴國中小學校所定課程，與歐米異同如何？

答 無大差，但就適於本邦者變更之，採長捨短。

訳文：

問 教育の事、僕の求むる所の者は貴國明治初年の開辦の法なり。我 公の身にて其の事を親しみ、正に下走^{わたくし}の側席して教えを求むる所の者なり。何ぞ幸いに枉臨^{おうりん}せられんとは。喜びの極みなり。

答 幸い寛假^{かんか}を賜い、欣^{きん}拊^ふに勝えず。僕は西京の一部の維新の學政に於いて、其の概略を知り、敢えて其の衷情を吐露せん。明治維新の始め、詔敕を以て府縣をして學校を設立せしめ、京都府知事の檜村氏、熱心に之を謀れり。其の方法は市街を分ちて六十の學區と為し、一區に一の小學を設く。其の校舍は新築せし者有り、亦た舊廬^{きゅうろ}を假りて之と為せし者も有り。家塾及び村塾の師を傭して、以て小學の教師と為す。郡村山邑に至るも亦た然り。故に京都府は日本の小學の嚆矢と為す。尋いで女學校・師範校を立て、教師を養成し、分ちて各校に遣わす。

問 其の初めて辦ずる時、市村の六十學區は、同時に並舉せしや。

答 市村の胥吏、論を聞きて即ちに興辦せし者有り、怠りて即ちには從事せざりし者有り。屢^{しばしば} 召喚して之を糾問し、其の首めて舉げし者は之に賞し之を譽め、他の怠る者も亦た遂に設立せり。明治四年より著手し、十年に至りて、山村海阪も署偏^{かいすう はばあまね}し。

問 此れ市村の自立するを責成するに似たり。其の經費も亦た為に籌措するや否や。

答 經費は市村自辦す。市吏は毎戸に課税し、正税・營業税・學校税と與に、并せて之を徴收す。

問 貴國の民間も亦た甚だしくは富まず、其の税を出だすこと能わざる者は奈何。

答 設立の際、巨費を需用し、故に其の學區内の豪商富紳をして寄附金を特募せしむ。而して

15) 方言：外国語。

16) 巴禮：巴來とも。『万国史』の著者ピーター・パーレー（Peter Parley）のこと。本名はSamuel Griswold Goodrich（1793-1860）、アメリカの作家。Peter Parley はペンネーム。

17) 那志與那：未詳。

18) 斯邊左：スペンサー（Herbert Spencer、1820－1903）のこと。イギリスの哲学者、社会学者、倫理学者。

毎戸に徴するの法は大小の別有り、且つ學兒有るの家は特に之を徴す。

問 學兒は每名尚お修金を出だすや否や。

答 皆自ら修學料を出だす。而れども二三十錢に過ぎず。（案ずるに十錢は洋銀一角に當る）

問 修學料は蓋し是れ筆墨・書籍・紙・石板等なり。教師の俸に至りては、學生亦た自ら出だすや否や。

答 修學料は即ち教師の俸なり。筆墨・書冊に至りては、則ち各^{おのおの}自ら之を買う。貧者には學校吏員或いは之を給す。

問 教師の俸、毎月二三十錢は^{はなは}太だ少なからずや。

答 一校の生徒、多きは是れ八・九百名、或いは六・七百名、故に集まりて巨額と成る。尚お足らざれば、則ち校費を以て之を補う。

問 八・九百名、六・七百名ならば、則ち學堂建築の功甚だ費ゆ。其の學區も亦た西京城内の人煙の稠密の處に在らば、乃ち許多の學童有り。若し鄉市野村に在らば、則ち學童數百名に至らば、必ず數里數十里の家より招して、乃ち能く集合す。此の學童は皆幼年なれば、豈^{ことごと}盡く學堂に在りて寄宿せんや。

答 市街の一學區は、大率千戸にして、皆稠密なれば、甚だ便なり。僻邑山間に至りては、則ち校舍皆狭小なり。故に大村は數校を設けて、以て就學に便とす。小學は皆寄宿舎無し。近日一二校に寄宿舎を設くること有るも、小童遠く數十里を隔てて來學する者有り。

問 近時は學制大いに備われば、辦理するに自ずから易し。明治初年に在りては、學童の寄宿、或いは幹事經營すること能わず、或いは房屋の適宜なること能わずして、當に種種困難の處有るべし。如何にして營辦するか。

答 吾邦の學生、皆能く教師・監督の命を守る。明治初年の生徒、轉^{かえ}つて今日の粗暴に似ず。

問 明治初年の學堂の課程は如何。恐らく其の時教師の西學を知る者尚お少く、如何にして課を立つるか。

答 明治初年の學課、屢^{しばしば}變改して定まらず。然れども太^{ママ}要は讀書・算數・地理・歴史・物理・倫理の六科なり。教師の西學を知る者は實に^{すくな}尠し。然れども英書の和譯を以て教科書と為す。

問 明治初年西京に已に大學堂を立てたるや否や。

答 否。大學を立てたるは明治二十年の後に在り。

問 中學校は何時立てたる。

答 明治九年に始めてこれを立てたり。

問 今我が國に中小學無く、京師已に擬して大學堂を建て、等を^こ躡^{わたくし}ゆるに涉る。下走、擬して敵國學徒の、年の二十内外に在る者を將て、其の漢學の粗^{はぼ}成りし者を考えて、招して西學に入學せしむ。此くの如きは可なるや否や。

答 尊意の在る所は即ち可なり。少年の本邦の事體を知らざる者、直ちに西學に従事せしめば、往往にして其の方向を誤る。

問 學徒は年二十内外に在り、漢學粗^{はぼ}成り、西學を研せしめば、其の課程は宜しく中學校を以て主と為すに似たり。而して初めて辦ずるには簡易を求めんと欲す。如何に法を定めん。

答 中學の課程は、先ず讀本（西洋讀本と稱する者は數種有り）を以て、其の善良なる者を選びて之に授く。物理・化學の如きは、則ち譯書を以て之に授く。方言の如きは則ち西人を聘して師と為す。

問 西師を聘するは是れ一定の辦法なり。敝國の外省に學を立つるは、則ち尚お盡くは西人を用うる能わず。貴國の西洋讀本と稱する所は、其の書は幾種。開示せられんことを請う。

答 明治初年は多く巴禮氏の讀本を用いたり。近時は那志與那氏の讀本及び斯邊左氏（案ずるに即ち斯賓塞なり）讀本等を用う。僕は未だ西學に詳しからず、故に其の名を忘る。

問 貴國の中小學校の定むる所の課程は、歐米との異同は如何。

答 大差無し。但し本邦に適せる者に就いては之を變更し、長を採りて短を捨つ。

四、長尾横太郎¹⁹⁾ との筆談記録²⁰⁾

原文：

問 此來欲取法貴國，設立西學。其課程過多，若益以漢文，則幼童無此腦力，若暫去漢文，則吾國國學，豈可廢棄？兼習不能，偏棄不可，束手無策，公何以救之？

答 小子前年承乏²¹⁾ 文部，今教授於高等師範學校。教育制度課程，非偶無鄙見。然今時當路，皆知西學之為急，而漢學則殆不省。蓋學徒腦力有限，姑擇其急者耳。然其弊則至忘己審彼，為國家百年計，不能無疑。今貴國設西學，欲漢洋兩學兼修，患課程之繁。中小學高等學校（大學豫備校）課程，半漢文，半西學，而晉入大學，則專修其專門學，則庶乎免偏棄之憂。小子雖不敏，若或有所便於尋求，犬馬奔命，所不辭也。

問 課程中半西半，僕以為甚難合併。西學不能求記誦，止是講授而已。漢學則非倍誦溫習，不能牢記。不牢記，則讀如未讀。今若使學徒倍誦²²⁾ 溫習，則一師不過能教五六學生，勢不能如西學之一堂六七十人，同班共受一學，此其難合併者，一也。西學門類已多，再加漢學，無此腦力，二也。至大學，則漢文僅止專門，專門則習之者少，其不亡如線²³⁾。此求兩全，必將兩失，奈何奈何？至執事允為尋求一切，感荷感荷！

答 學校之難設，非大中小皆具備，則難得完備。然新建制度，不可遽望完備，以漸就緒，為得其宜。敝邦初建大學，命州縣徵貢進生²⁴⁾。貢進生者，謂各州所貢進也。貢進生大抵成年以上，已

19) 長尾横太郎：當時は高等師範學校教授、後に中国に渡り長く商務印書館に勤務する。詳しくは樽本照雄『初期商務印書館研究 増補版』（清末小説研究会、2004年）を参照。

20) 筆談は8月25日に行われた。前掲呉汝綸『東遊叢錄・摘抄日記』に、「廿二日（8月25日）、長尾横太郎、字雨田、見過。談教育事甚詳明。謂日本初興學、取諸州縣貢進生、入大學預備科、使學西學。其後中小學校既備、而後貢進生之制度始廢。今吾所欲推行者、即此貢進生之制也。」とある。

21) 承乏：任官する、の謙讓語。もともと、適當の人選がないので、自分が暫く其の空位を補充する意。

22) 倍誦：背誦に通じる。暗誦する、の意。

23) 不亡如線：細い糸がいつでも切れる恐れがあるのと同じように、いつでも亡くなる恐れがあること。

24) 貢進生：明治初年各藩からの推薦を受けて大学南校に入学した生徒のこと。この貢進生の制度について、呉は視察期間中に京師大学堂訳書局副総辦の林抒に送った書簡の中で次のように述べている。「此邦教育程度、吾國已覺難追。其明治初年、由各藩選取生徒、送入大學、謂之貢進生。其後大學畢業、視後來由中小學堂昇入大學者、其卒業程度反高。以其根氏漢學者深、其研究西學更易。今吾國尚無中

在其郷修得國學（敝邦舊時國學多為漢學），及遊京入大學豫備門修西學，而後入大學就專門。以俟中小學校生徒之卒業而出，既得中小學校卒業生，而此制廢。凡新設法，過急則敗，要在使人東西更面而不自知也。貴國大學堂，先選舉人以上之人材而就學，待中小學之備，而徐制學則學課，於其統系聯絡，蓋得一貫乎。

問 貴國貢進生入大學豫備門，其所學課程如何？公能言其大略乎？敝國今日願倣此制。

答 重當拜候。

問 急盼見視教育沿革。

訳文：

問 此の來たるは法を貴國に取りて、西學を設立せんと欲すればなり。其の課程は過多にして、若し益^ますに漢文を以てせば、則ち幼童は此の腦力無く、若し暫く漢文を去らば、則ち吾國の國學、豈廢棄^{あに}す可けんや。兼習すること能わず、偏^{ひとえ}に棄つること可ならず、手を束ねて策無し。公は何を以て之を救わん。

答 小子^{わたくし}は前年乏しきを文部に承け、今は高等師範學校に教授す。教育の制度と課程は、偶^{たまたま}鄙見無きに非ず。然れども今時の當路は皆西學の急と為すを知れども、漢學は則ち殆ど省みず。蓋し學徒は腦力に限り有りて、姑く其の急なる者を選ぶのみ。然れども其の弊は則ち己を忘れ彼を審らかにするに至り、國家百年の計を為すに疑い無き能わず。今貴國西學を設け、漢・洋兩學を兼修せんと欲するも、課程の繁^{すす}を患う。中小學高等學校（大學豫備校）の課程は、半ば漢文、半ば西學、而して晉^{すす}みて大學に入りては、則ち専ら其の專門學を修めしめば、則ち偏棄の憂を免る^{ちか}るに庶^{わたくし}からん。小子は敏ならずと雖も、若し或いは尋ね求むるに便なる所有らば、犬馬として奔命するも、辭さざる所なり。

問 課程の半半西半は、僕以為らく甚だ合併し難しと。西學は記誦するを求むること能わず、^ただ是れ講授するのみ。漢學は則ち倍誦・溫習するに非ずんば、牢記すること能わず。牢記せざれば、則ち讀むも未だ讀まざるが如し。今若し學徒をして倍誦・溫習せしめば、則ち一師は能く五・六の學生を教うるに過ぎず、勢い西學の一堂六七十人、班を同じくして共に一學を受くるに如く能わず。此れ其の合併し難き者の一なり。西學の門類已に多く、^{さら}更に漢學を加うれば、此の腦力無きは、二なり。大學に至らば、則ち漢文は僅かに専門に止まり、専門なれば則ち之を習う者少なく、其の亡びざること線の如し。此れ兩全を求むれば、必ず將に兩つながら失わんとす、奈何せん奈何せん。執事 為に一切を尋ね求むるを^{ゆる}允すに至りては、感荷せん感荷せん。

答 學校の設け難きは、大・中・小皆具備するに非ずんば、則ち完備を得難ければなり。然れども新たに制度を建つるは、遽かには完備を望む可からず。漸を以て緒に就くは、其の宜しきを得ると為すなり。敝邦初めて大學を建つるに、州縣に命じて貢進生を徵す。貢進生

小學堂、而先立大學、似宜仿照日本貢進生成法、取十余廿余年之生徒本國學問已成者、使之入學講求西學、似為便捷、又不至有盡棄所學而學之弊、執事以為如何？」（前掲『吳汝綸全集』第三冊422－423頁、與林琴南）

なる者は、各州の貢進する所を謂うなり。貢進生は大抵成年以上にして、已に其の郷に在りて國學（敝邦舊時の國學は多く漢學たり）を修得し、京に遊ぶに及びて大學の豫備門に入りて西學を修め、而して後に大學に入りて専門に就く。以て中小學校の生徒の卒業して出づるを俟ちて、既に中小學校の卒業生を得て、而して此の制廢る。凡そ新たに法を設くるは、^{はなは}過だ急なれば則ち敗る。要は人をして東西面を更えしむるも自らは知らざること

に在るなり。貴國の大學堂は、先ず舉人以上の人材を選びて學に就かしめ、中小學の備わるを待ちて、^{おもむろ}徐に學則・學課を^{つく}制り、其の統系に於いて聯絡すれば、蓋し一貫を得るか。

問 貴國の貢進生の大學豫備門に入りて、其の學ぶ所の課程は如何？公は能く其の大略を言うか。敝國は今日願わくは此の制に倣わん。

答 重ねて當に^{つつし}拜^{うかが}みて候うべし。

問 急ぎ教育の沿革を^{しめ}視さるるを^{のぞ}盼む。

五、研經會²⁵⁾での筆談記録²⁶⁾

原文：

問 高等學校組織如何？

答 大要分三部。一部為法科文科，二部為工科，三部為醫科。三年課畢入大學，以國語漢文為基，兼修英獨佛三國語。如工科醫科，別有實習。

問 人有言學西國語言甚費腦力，必數年乃成，成矣尚非真學，必別學一專門之學，乃為本領，故此事甚難。若不學外國語言，得已^こ繙之譯書，或用西師講授，使人通譯，以告學者，較易從事。公以為何如？

答 吾國維新前，幕府開²⁷⁾蕃書調查所者，使專門之士，譯之以弘布。維新後十年間，亦如是。至十年以後，西學大盛，遂至如今日。今則以西人為教官，使學生學之。然²⁸⁾語原元殊，

25) 研經会：1897年に設立された、經學及び經學に關係のある學問を研究する漢學研究団体である。1918年に斯文会の設立に加わって發展的に解消するまでは毎月一度講演会を開催していた。

26) 研經会の招待宴会について呉の日本視察日記のなかでは触れられていない。ただ『東遊日報訳編』（華北訳書局、1903年）に、「研經会漢學家諸氏、六日招待呉先生、於星岡茶寮開雅筵。是日午後、先生率隨員二名、訳官一名。交換名刺。安井氏述本会之宗旨、及将来彼此親交之誼、図學問之利益。先生亦草一文為答辭。……由是相與筆談、彼此尽歡、不知夜之深也。」とあり、これより研經会での筆談が招待宴会のあった9月6日に行われたことがわかる。また前掲『呉汝綸全集』所収の「研經会招待席上答辭」と「研經会招飲於星岡次韻答池田精一絶句」からも、同歡迎会で、安井氏による演説と呉の答辭があったことが裏付けられる。さらに同『呉汝綸全集』所収の「研經会招飲於星岡次韻答池田精一絶句」から池田精一との間で漢詩の唱和があったことが分かる。しかし、この筆談の相手が誰なのかは依然未詳である。ちなみに呉は答辭のなかで、西學を取り入れなければ国が自立できないと西學輸入の重要性を強調するいっぽう、中国の伝統の學問は欠点もあるがこれからも大事にしなければならないと述べている。

27) 蕃書調査所：蕃書調所のこと。江戸幕府直轄の洋學研究教育機関。1855年に開設した洋學所を1856年に改名してできたもの。開成所の前身で東京大学の源流諸機関の一つとなる。

28) 語原：「語源」に同じか。

領會甚苦，其費腦力非少。如下走以高見為當，然時勢無奈之何。

問 貴國前輩，似皆以漢學為根柢，後進之士，則吐棄漢學，一奉西文。究竟人材，後進與前輩風采孰勝？

答 吾國前輩之奉西學者，以漢文為根柢，加之以西學，是以多有為之士。較人物古勝今劣。僕不知西學，然在工技之學，不可不資²⁹⁾於西學。正德利用與厚生³⁰⁾，學問之要，三言備之。東洋道德，西洋工技，合之始成。賢者當合併東西，陶鎔一冶³¹⁾。

問 正德利用厚生，實括東西學之大成。貴國維新以後，德育智育體育，三事并重，近來智育體育皆著成效。德育今與古孰若？

答 吾國古有武士道者，加以貴邦聖賢經傳，大有可觀。今西學傳來，混入西學分子。德育一貫，甚為難事，貴邦亦恐不能免。

問 如何而後使德育之說，不至徒託空言？

答 大問不敢當。然以鯁生³²⁾見之，道德莫³³⁾尚大聖孔子，天定之日，必風靡東西矣。此後進之所當勉也。敝邦明治七八年之交，西說盛行，至婦女子亦唱民主說。幸得迴狂瀾於未倒。蓋欲取人之長，則其短亦不可不防，是必至之勢也。唯有力而後取捨無失，切望慎之。

訳文：

問 高等學校の組織は如何。

答 大要は三部に分かつ。一部は法科・文科たり、二部は工科たり、三部は醫科たり。三年の課畢れば大學に入り、國語・漢文を以て基と為し、英・獨・佛の三國語を兼修す。工科・醫科の如きは、別に實習有り。

問 人の言うこと有り、西國の語言を學ぶは甚だ腦力を費やし、必ず數年にして乃ち成り、成るも尚お眞の學に非ず、必ず別に一つの専門の學を學びて、乃ち本領と為すと。故に此の事は甚だ難し。若し外國の語言を學ばずして、已に翻譯し譯書を得て、或いは西師を用いて講授し、人をして通譯せしめ、以て學ぶ者に告ぐれば、較從事し易し。公は以為らく何如と。

答 吾國は維新の前、幕府は蕃書調査所なる者を開き、専門の士をして之を譯せしめ以て弘布す。維新後の十年間も亦た是の如し。十年以後に至り、西學大いに盛んとなり、遂に今日の如きに至れり。今は則ち西人を以て教官と為し、學生をして之を學ばしむ。然るに語原は元より殊なり、領會するに甚だ苦しみ、其の腦力を費やすこと少なきに非ず。下走の如きは高見を以て當と為す、然るに時勢は之を奈何ともする無し。

問 貴國の先輩は皆漢學を以て根柢と為すに似たり。後進の士は則ち漢學を吐棄し、一に西文

29) 資：ここでは「鑑みる」「取る」の意。

30) 正德利用與厚生：『尚書・大禹謨』に「正德利用厚生惟和」とある。正德は道德を正すこと、利用は民力と財力を有効に活用すること、厚生は民の生活を豊かにすること。

31) 陶鎔一冶：二つ以上のものの、もとの形を変えてひとつのものにすること。融合すること。

32) 鯁生：鯁は小魚、雜魚のこと。取るに足らない、つまらない者。謙讓語。

33) 莫：文脈からして、「莫如」の誤りとして扱う。

を奉ず。究竟するに人材は後進と先輩と風采孰れか勝れる。

答 吾國の先輩の西學を奉ずる者は、漢文を以て根柢と為し、之に加うるに西學を以てし、是を以て有為の士多し。人物を較ぶれば古は勝り今は劣る。僕は西學を知らず、然れども工技の學に在りては、西學に資らざる可からず。正徳・利用と厚生とは學問の要にして、三言之を備う。東洋の道德、西洋の工技、之を合して始めて成る。賢者は當に東西を合併し、陶鎔一冶すべし。

問 正徳・利用・厚生、實に東西の學の大成を括る。貴國の維新の以後、德育・智育・體育の三事を并せて重んじ、近來智育も體育も皆成效を著す。德育は今と古と孰若れぞ。

答 吾國に古は武士道なる者有り、加うるに貴邦の聖賢の經傳を以てし、大いに觀る可き有り。今西學傳來し、西學の分子を混入す。德育を一に貫くは、甚だ難事と為す。貴邦も亦た恐らく免るること能わず。

問 如何にして後に德育の説をして、徒らに空言に託するに至らざらしめんや。

答 大問は敢えて當らず。然れども鯁生を以て之を見れば、道德は大聖孔子を尚ぶに如くは莫く、天の定まるの日に、必ず東西に風靡せん。此れ後進の當に勉むべき所なり。敝邦の明治七八年の交、西説盛んに行われ、婦女子に至るも亦た民主の説を唱う。幸に狂瀾を未だ倒れざるに廻らすを得たり。蓋し人の長を取らんと欲せば、則ち其の短も亦た防がざる可からず、是れ必至の勢なり。唯だ力めて後に取捨に失無きこと有るのみ。切に之を慎まんことを望む。

六、望月興三郎³⁴⁾との筆談記録³⁵⁾

原文：

問 台端³⁶⁾ 勸興女學，聞貴國十年前，女學尚未大行，後用何法鼓勵，遂有今日之盛？望示之。

答 愚按、欲策女子教育之良法、須參照者有三。一過去歴史、今日之教育、不可不與以往女子教育連絡一貫。二現在狀態、今日之教育、要基於女子之現狀、鑑男子之程度、且照於文明諸邦之女子教育法。三未來之進歩、當豫想國家將來之進歩、并世界文明之趨勢而立案。此外更有一事、則國家之觀念、即愛國心之涵養是也。蓋女子最富愛情、而其愛也、僅止於一身一家、而未有及國家者。以其闇於歴史、且不識列國對峙之形勢。故欲使女子養愛國之心、不可不待於教育之力也。受教育富愛國心之女子、他日為人母、於其膝下撫育之子女、受其感化、其愛國必矣。天下養愛國之美、有過於家庭者哉。是故於女子教育、涵養國家觀念之

34) 望月興三郎：前山陽高等女學校校長。前掲『東遊叢録・函札筆談』に「前山陽高等女學校校長望月興三郎來書」、『吳汝綸全集』第三冊に「答女學校長望月興三郎」が収録されている。また国会図書館の蔵書によれば『家族主義女子教育』（望月興三郎著、福音社、1892）、『私立山陽女學校報告』（望月興三郎編、1894）、『富蘭克林自叙伝』（望月興三郎訳、青木高山堂、1894）などの書籍を公刊している。

35) 吳汝綸の日記に筆談について触れられていないので、筆談の日にちは未詳であるが、注34)に示した吳汝綸の望月への返信の日付は七月廿六日（8月29日）なので、筆談はそれ以降に行われた可能性が大きい。

36) 台端：相手に対する敬称。貴下。

方針，甚屬重要之事也。

問 貴國女學未愜心者何事？

答 小生以為西學所最重要者，在其精神。然方今流弊偏重物質，是其所大遺憾也。

訳文：

問 台端は女學を興さんことを勧むるも、貴國十年前は女學尚お未だ大いには行われずと聞く。後に何の法を用いて鼓勵し、遂に今日の盛有るや。之を示さんことを望む。

答 愚按ずるに、女子教育の良法を策せんと欲せば、須らく参照すべき者は三有り。一は過去の歴史なり、今日の教育をして以往の女子教育と連絡し一貫せしめざる可からず。二は現在の状態なり、今日の教育は女子の現状に基づき、男子の程度に鑑み、且つ文明諸邦の女子教育法に照らすことを要す。三は未來の進歩なり、當に國家の將來の進歩並びに世界文明の趨勢を豫想して案を立つべし。此の外に更に一事有り、則ち國家の觀念、即ち愛國心の涵養、是なり。蓋し女子は最も愛情に富み、而れども其の愛や僅かに一身一家に止まるのみにして未だ國家に及ぶ者有らず。其の歴史に聞く、且つ列國對峙の形勢を識らざるを以てなり。故に女子をして愛國の心を養わしめんと欲せば、教育の力を待たざる可からざるなり。教育を受け愛國心に富むの女子は、他日に人の母と為り、其の膝下に於いて撫育せらるるの子女、其の感化を受け、其の國を愛すること必せり。天下 愛國の美を養うは、家庭に過ぐる者有らんや。是が故に女子の教育に於いて、國家の觀念を涵養するの方針、甚だ重要な事に屬するなり。

問 貴國の女學未だ心に愜わざる者は何事ぞ。

答 小生以為らく、西學の最も重要な所は其の精神に在りと。然れども方今の流弊は物質に偏重す、是れ其の大いに遺憾とする所なり。

本稿は科研「清末民国初期の中国の教育雑誌から見た日本近代教育の中国への影響」（基盤研究（C）代表者名 呂順長 2012年～2016年 課題番号24520818）の成果の一部である。

